

0.

主要登場人物

あしもりえいいち むかいつきこ せのかわ かなみ とえ はつか まさかりゆうじろう こはつしょう ながつき こはる とびい かさね
 葦杜英一、霧海月子、瀬之川奏美、十慧初佳、正雁游次郎、瑚潑紹、名賀搗小春、飛井累、
 なおは つねひと かずいえしんいちろう ほと ゆうと おおしぶきようすけ ちがたけ ももか しもとゆみ よしお たけし ぼうのい かねすけ
 那於巴常人、和家慎一郎、甫土侑人、多洪京典、千ヶ嶽百香、楚 由海、嘉尾健、坊之威兼輔

1.

巷が夏休みの頃のこと。遣道学園美術部は予てより予定されていた夏季合宿の為に遠方へと繰り出していた。東北のA県くんだりまでバスで赴き、当地の名勝地に宿を取ってその風光明媚なる様を部員一同は大いに楽しみながら写生大会に励み、充実した旅程を過ごした。合宿日程を終えた一同は名残惜しさを抱きながらも帰りのバスへと乗り込んで長い山道进行高速道路に揺られている。行きも長く、長らく森の中を走ったものだが帰りもまたその様なもので部員らの多くは話題にすることも尽きており幾人かが尚もお喋りをしているが寝入っている顔の方が目立った。

「英一はどうだった？ 楽しかった？」

葦杜英一の隣席を占める霧海月子が視線を投げ掛けてそう問う。夏用のセーラー服を纏うショート型の髪型に落ち着いた印象を与える面立ち。その見知った顔の銜いのない興味。彼女と英一は旧知の仲でありその付き合いは幼稚園まで遡れる。周囲の多くはこの様な二人をよく囃し立てていたものだが、両者には不思議と彼らが云う様な相互への関心と気恥ずかしさが強くなかった。

「まあまあ、かな。普段はこんな遠くまで出て来ないから描かない様なものも描けたし」

「そつ。私は満足ね。街だと人工物尽くしで、直線ばかり引いて終わるから」

月子は少しだけ歯を見せて笑みを浮かべた。そして直ぐに視線を外して、斜め前の席を見た。彼女が視線を向けた瀬之川奏美は疲れているのかすすうと静かな寝息を立てて寝入っていた。長く垂らしたのみ上げと後ろで二つにまとめた髪型が如何にも女の子の子と云う印象を与える小柄な女子。三人は二年生であり、月子と奏美は誰もが認める親友だった。明るく活動的な月子と穏やかで控え目な奏美の対比はどこへ行っても映えるものだった。そして不思議と二人に求められて英一はその傍を付いて行くことが多かった。月子が屈託ない笑顔を、奏美がはにかみを示しながら誘うそれに彼はこれを叶えるのが自分の役回りだと思ふものだった。

「オホン。あまり見せ付けないでくれなにかね英一君」

後ろの席からどこか堅苦しく気取った声が掛けられる。声の主は和家慎一郎と云ってうわぶち眼鏡をしたお堅そうな姿見の男子である彼は美術部の副部長だがその渾名はむしろ学級委員長であるところから委員長と呼ばれるところの多い少年だった。

「見せ付けるって、そんなじゃないですよ委員長」

「と云いはするが、君達二人がそうしてイチャイチャしているのは実にそう見えるんだが」

「私たちが友達付き合っているのが悪いことですか？」

「いやそうではないけどだね……」

慎一郎はこう云うどこか言わずともよいことを一々口にする男なのは二人にもよくよく知れたところではあり、二人としては余り気にしていなかった。のだが、横槍を入れる様にまた別の声が飛ぶ。

「はいはい、フクブチョーは健全な男女に嫉妬それこそモテないぞー」

「なっ、いや、何を言うんだ!？」

「五月蠅いよー、ここはバスの中静かにしようねー」

慎一郎と反対側の席に座っている女子があしらう様に彼を見もせずになんと言った。外跳ねのロングヘアに長身と云う見た目にも美人そのものである十慧初佳は三年生で美術部前部長に当たり、進路は既に固まっているが故に夏休みが暇であるからとこの合宿に参加していた。二年生の部長は前の席で寝ている。このどうでも良いことに對する我関せずぶりは彼女が部長を気に入っている点らしい。初佳に冷やかされて慎一郎は押し黙った。起きていたがために周りで聞いていた者らから微かにくすりと笑いがこぼれた。まあ、よくあることさ。英一はそう思って、窓の外を見やる。トンネルが近付いていた。

そのトンネルは長く、彼らが乗るバスの他に車の姿は見られなかった。暗い内部を電灯が次々と過ぎ行く。この様な景色にはどこか非日常性を感じられた。ただ同じ回廊を歩く感覚。それが終わることをどれだけ期待してよいのか分からなくなる繰り返しの光景。……そんな香気なことを英一は考え、欠伸を一つした。彼もいい加減少し眠気を覚えていた。傍らの月子は既に眠ってしまった。その寝顔に英一はどこか安心感を覚え、自分も眠りに落ちようと瞼を閉じる。

丁度その時だった。瞼に急な光が差し込むのが感じられ、彼は目を開ける。トンネルの奥から白い光が迫って来る。それは波が打ち寄せる様に迫った。バスの運転手や顧問の教師が何事か言葉を発していたが、彼にはよく聞こえなかった。視界を灼く様な光に一同は包まれた。――光が過ぎ去った後、バスは急停車した。厳密には光に吞まれる前には運転手はブレーキを踏んでいたのだが、どう云う訳か漸く止まったのが今頃と云うものだった。トンネルの出口から半ば顔を出したバスの中で顧問の教師が学生たちの無事を確認しようと後ろを顧みる。

「お、おい、どう云うことなんだ、何が起こった!？」

「え? ……えっ?」

車内には僅かに六人しか残っていなかった。部員の姿は部長と三人の部員を残して悉く消えていた。

英一は腕で目を守っていた。光が止んだ後、彼は窓から外を眺めた。バスは尚も走っていたが、トンネルは既に抜けていた。辺りには森が広がっていたが、その樹々の隙間から覗かれる空模様はいやに暗かった。否、歪んだ色合いをしていた。英一は空を見上げる。そこには晴れとも闇ともつかぬ禍々しい模様を帯びた空だけが広がっていて、凡そ彼の知った道、彼の知った空などではなかった。英一は月子を見た。月子は先程の光に眠りを邪魔され、どこか不機嫌そうに起き出していた。

「何……今の光……」

「月子、何かおかしい。外を見て見ろ」

「は? 外?」

寝ぼけ眼の月子が外を、その空を見て顔色を変える。周囲もそのおかしさに段々と気付き、バスの内部は騒ぎになり始める。そこで一人の声が上がった。

「おい、先生も運転手さんもいねえぞ!」

一同は二人が座っていた筈の場所を見た。そこには手荷物さえ無い空席だけがあった。何より運転手の不在はバスが慣性に任せて走り続けているだけになっていることを理解させた。そしてまた一人が気付いた。バスは崖に向かってしていると。だが、学生などに何が出来ると云うのか? 彼らは殆ど考える時間も事態を理解する暇をも与えられぬままバスが崖先へ飛び、坂道へ飛び出してこれが横転して行く憂き目に乗り合わせなければならなかった。

速度が落ちていたことと断崖絶壁ではなく坂道へ飛び出したことが幸いしたのか、バスは横転と破損を繰り返して転がり落ちたものの乗客に重篤な怪我を負った者は奇跡的にいなかった。落着いた森の少し開けた場所にて、学生たちはボロボロに凹みガラスと云うガラスの割れた車内から這い出す。想像だにしない不運に巻き込まれた彼らは突然に不在となった顧問や運転手を詰りたい心境であったが、やがて幾人かの部員、自分たちの仲間もまた居合わせていないことが知れた。まさか、坂道で放り出されたのか？　ぞくりとした不安が皆に走り、彼らは互いを見やって言葉もなく不安を投げ掛け合った。

「おつ、おれ、探して来る。部長たちまだ坂にいるかもしれないねえ！」

二年生の一人である瑚潑紹がそう言って駆け出そうとする。これに慎一郎が待ったを掛けた。

「いや待て、ここがどこかも分からないのに迂闊にこの場を離れるのは危険だろう。大人しくして救助を待った方がいい」

「そんなこと言ってもよ、怪我してたら大変じゃねーか！」

「それはそうだが、僕らだって怪我が全くない訳でもない。大体こんな山の中だぞ、熊にでも襲われたらどうするんだ」

一見すると尤もらしく思われるところを慎一郎は指摘するので紹は俄かに次の文句に窮したが、ここでまた横槍を入れたのは初佳だった。彼女は腕組みをしてどこか苛立たしそうに言う。

「熊に襲われるんならここも一緒でしょ。むしろ下手に坂道に誰か放置して餌になってしまいう前にここまで連れて来た方がいい。あと、ここに残っている面子も確認しないといけない。誰がいて誰がいなかったのかはつきりさせてやらないと、誰を探せばいいのか分からなくなるじゃない」

「……十慧先輩は前部長であって、この場に部長は……いないなら僕が副部長として皆を仕切るべきではないのですか？」

「仕切り役をどうこう言っている場合？　いない子の命掛かってるかもしれないのよ、ほら、これはクン、他に行ってくれる子集めて」

不服そうな慎一郎を尻目に初佳がリーダーシップを発揮し、ときばきと話を進めて行く。それでこの場には十四人があり、部長と三人の一年生の計四人が顧問及び運転手共々に姿が見えないことも分かった。それを確認した初佳は紹と数人の部員を放って不在の者を探しに出させた。英一と月子は残っていた。と云うのも、奏美が軽い怪我をしていてまた他にも怪我をしている部員がいたことからこの場に残ってその手当てをする者が必要だった。男手は搜索に回してもいいのではと英一は初佳に意見したが、ここに妙な猛獣が紛れ込んで来た時男が誰もいないと困るじゃない、とにべもなく切り返された。

「あんた運動部じゃないけどガタイ良いじゃない。確か実家が剣道場だっけ？　ここらには精々木の枝ぐらいいかないけど、厄介事になったら期待させてもらうわよ」

こんな風にして英一は残され、奏美と仲の良い月子も成り行きで残った。座り込む奏美は屈み込んで絆創膏を張る二人にはにかなだ。バスの荷は手荷物以外横転したその内部に残されたままで、運の悪いことにその開閉口が地面側に向いてしまっているせいで着替え等を取り出すことが出来ないが準備の良い奏美は自分の携帯鞆に消毒液や絆創膏の様な応急手当一式を収めていたのでこの様な場面でその存在を有難がられた。

「ありがとう、英一くん。月子ちゃんもごめんね、手間を掛けて」

「いや、気にしないでいいよ。何かいざと云う時の肉壁みたいな扱いだし」

「ぶっ、肉壁って！　英一強いから大概の奴なんて返り討ちでしょ」

「いやー、狼と云うか野犬やそれこそ熊が相手じゃどうにもならないだろ」

こんなやり取りの後、英一は周囲を見る。三年生の正雁游次郎が近付いて来ていた。

「消毒液、借りれるか」

「あ、はい。いいよな？」

「あ、どうぞ」

「ありがとう」

口数少なく游次郎は踵を返す。彼の向かう先には一年生の多洪京典がいた。游次郎は少しくせ毛を感じる二枚目然とした美男で、部活中は眼鏡を掛けていることも多いがその姿も様になる寡黙さがイメージによく似合った男だった。一方で熱心な部員であるがそれ故にその傾倒ぶりから顧問から進路の心配をされる様な男でもあり、英一にとっては入部当初今一つ要領の掴めなかったデッサンのやり方を教えて貰ったことから然程多くを話さずとも彼のことを信頼していた。尤も、自身の進路についてはあまり周囲に心配を掛けさせない様にした方が良いのではとも思っているのだが。

一通りに手当てが終わったところで一同は捜索班が帰って来るまでに今後の方針について議論した。持ち合わせている食糧は各々がバスに持ち込んでいた飲料と菓子類の残りのみ。積み荷にはお土産として買ったものが幾つかあった筈ではあるが、現状では取り出しようもない。必然的に彼らは空腹に怯える立場となる訳で、この場から移動した方が良いのではないかと云う意見が出た。

「こんな山中で野垂れ死にだなんて真っ平御免よ。空模様訳わかんないけど、ここが日本ならどっか探せば家なり村なりあるでしょ。そこまで行って警察にでも連絡を付けましょうよ」

二年生の一人である千ヶ嶽百香はこう言う。二つに結われた髪を下に垂らして肩の前に下ろしている小柄な、風貌は可愛いと評判だが言動にやや難があることで知られる女子部員。彼女ならずとも手持ちのスマートフォンにて通話を試した者はいたが、電波は圏外と云うことでこれらは目下時計以上の役には立ちそうもなかった。

「だがそれこそどこへ行くと云うんだ。僕らは全く地理不案内だぞ。出鱈目に歩いても集落に出られるとは限らない。下手に動いたらそれこそ熊にでも出くわすんじゃないか？」

「熊、熊、ほんとあんた熊好きねえ。出てきたら諸手を挙げて歓迎してやりなさいよ。アタシは餌になんかなりたくないからね」

「そう云う話じゃないだろうに……！」

「いや、止さないか！ 喧嘩して得るものなんか何も無いだろう」

英一はつい仲裁を試みたが、慎一郎にしろ百香にしろ英一に苛立たし気な視線を投げ掛けて来る。これを見て初佳が溜息一つ付いた。

「じゃ、偵察でも放ちましょうか。少人数で周囲を確認して何か見つかったら報告する。これでどう？」

「ああそうね、それがいいわ。じゃ、言い出しっぺの十慧パイセン、行ったらっしやい。あたしは疲れてるからここで待たせてもらおうわね」

「は？ ……ったく、千ヶ嶽はこれだから」

言い出した手前断れないがこう云う扱いを喰らうことに初佳は機嫌を損ねているらしかった。英一はさあどうしたものかと思っていたのだが、そこで隣の月子が手を挙げる。

「私、行きますよ。一応テニス部員でもありますからちよつとは体力ある方だと思いますし」

「ふうん、霧海はやっぱ良い子ね。話を面倒臭くしないで動いてくれるから」

「誰のこと言ってるわけ？」

「さあね？ じゃ、とつとと行きましょう。こっちが斜面だから……その反対方向が良いかしら。あれ、向こうが北側なの？ 私たち南に向いて走ってたと思ってたんだけどな」

初佳がスマートフォンの方位磁針機能を用いて方位確認をしながら首を傾げる。ここで英一の服の裾を奏美が引っ張った。振り返った英一に奏美が耳打ちする。

「英一くん、わたし、月子ちゃんを送り出すのちよつと不安があるから一緒に行ってあげて欲しいの」

「え？　そうか？　月子だったら大体なんでもやれると思うけど」

「でもきつとこんなことになって内心は心細さがあると思うの。初佳先輩が悪い訳じゃないけど、一緒にやってくれるなら英一くんの方が安心出来ると思うな」

こんな風に頼まれては英一も断れるものではない。彼は動こうとする月子と初佳に呼び掛けて自分が代わりに行くとし出した。これには初佳も少し感心した様子を彼を見やった。しかし少しだけ間を置いて月子を一度見、初佳はずいっと近寄って英一に耳打ちする。

「あんだ、奏美ちゃんと月子のどっちが良いわけ？」

「はい？」

「あんまりとぼけるのは誰の為にもしないでしように。あんだら三人が美術部じゃいつでもつるんでいるのは見慣れた景色よ。馬鹿のイインチョーとか一年の那於巴とかにあれこれ言われてるの知らない？」

「まあ……でも二人とも付き合い長いと云うか、良い友達だから……」

「友達って、ねえ……。まあいいわ、とりあえず霧海と行って来なさい。あんだとあの子なら万が一でも大丈夫だとは思うけど、ヤバいと思ったらすぐに逃げて戻って来るのよ」

初佳は一度英一の肩を平手で叩くと、ひらひらと手を振って去って行った。よく分からないと云う顔をする英一を月子はどこかしやうがないやつと云う表情で眺めていた。

英一と月子は獣道の道すがら然して話をしなかった。お互い視線を投げ掛け合ってそれで特に言うべきことが無いことをどこか確かめ合う様に目が合い話をする前に話は終わってしまう。こんな二人は進む道が僅かにせり上がった斜面に差し掛かっていることに気付き、もしかしたら高所に出られるかもしれないと考えた。そこで漸く二人はまともに口を利いたので、月子がどこかおかしくなってしまうからと笑った。

「何だ、そんなに笑って」

「いやー、さっきからずっと目は合うけど特に何も言っていなかったのにこう云うところだけ同じこと考えちゃうから、ついね」

「ああ、まあ……そんな時だってあるんじゃないか？」

「お互いのことが手に取るように分かるって、つくづく理想でしかないよね。そんな風になっていれば誰も苦労しないって云うか」

二人はともかくも笑みを浮かべ、斜面を歩く。英一はふと地面を見て、あまり植生が豊かではないのではないかと思った。雑草が地面を覆っているのが山道と云うものだろうところ、ここはそうした気が乏しく茶けた土が剥き出しになっていることが少なくなかった。周囲の樹々もよくよく観察するとあのトンネルをくぐるまでに見た様なものではなく、同じ広葉樹でも見た覚えのない種類ばかりなのではないかと思われた。

二人は斜面の頂上で開けた景色に出た。空がよく見える。その禍々しく不吉な空。今が昼であるのか確信を持たせかねる紫だの黒だの青に赤だの種々の斑紋が浮いている謎めいた空。その天蓋に覆われた森の先に二人は建物の姿を認めた。

「あれは……何だ？」

「何でしょうね……西洋の、城？」

謎めいた城郭と思しきものが幾らか離れたところに見られ、それは城壁で囲まれその東西には城郭を守る支城を思わせる楼閣が聳えている。その城郭の背後にはまた山があり、城壁の西側には地面自体が凹んでいる様な大きな道めいたものがあり東側には遠目に湖らしきものが見出された。しかしそこから東西の彼方は森以外見渡せなかった。振り返った南には高い山があり遠目にバスが滑落したであろう山道とトンネルらしきものが見えもしたが、そこには舗装が為されていない様にも見られた。

どう云うことなのか？ 二人は首を傾げ互いの意見を質したが、この場で満足の行く解を得られるようには到底思われなかった。

二人がバスまで戻って来た頃には不明者の搜索に出ていた面々も戻って来ていた。紹曰く持ち物一つ見つからなかったと云う。

「ただが一番信じられなかったのは頑張って斜面登り切ってトンネルを確認した時ですよ。トンネルだと思ったらそれは洞穴で、しかも奥は崩落してたのか埋まってそれ以上進めなかったんです。おまけに車道のコンクリート舗装やガードレールなんかどこにも無かったし道の先はまたただの森しかありませんでした」

紹と共に搜索に出た一年生の那於巴常人がこの様に話すのを聞かされた面々はそれこそ信じられないと云う顔で聞いていた。

「嘘を吐いているんじゃないだろうな」

慎一郎が詰問気味に問い掛けると今度は同じく一年生の飛井累が反駁した。

「嘘じゃないですよ！ あたしだって登って見て来たんですから！ そんなに信じられないなら自分で確かめて来て下さいよ！」

「そうだそうだ、おれも見たんだ！ 一緒に来た侑人先輩だって見たんだぞ！」

何か言えば皆に袋叩きにされているが如き慎一郎は顔を赤くしながらも黙ってそれ以上言うのを避けた。普段はもうちょっとと無難なことを言える筈なだけどな、と英一は思いつつ慎一郎を労わる様に見やったが、彼はそれに気付くとぶいと顔を背けてしまった。

話は英一と月子が持ち帰った情報に移った。謎の城郭の存在は勿論一同を驚かせたが、周囲に目立つ人家が見られないことに百香が疑わしそうな視線を向ける。

「ちゃんと確認したわけ？ んな意味の分かんない城だけ見つけて帰っても何の役にも立たないでしょ？」

「千ヶ嶽さん、文句があるならって話じゃないけど建物は他にはさっぱり見られなかったわ。森に隠れている小さな建物ならあるかもしれないけど、ここから見渡せるところに街や村、或いは一軒家は見つからなかったわ」

「そういう俺らがトンネル確認した時も遠目になんか建物っぽいのが見えはしたけどありや城だったんだな。遠かったから今一ピンと来なかったや」

「呑気なこと言ってるさあ……アタシたちの命が掛かってるのよ？ 何とか助けの一つも呼ばないところでどうしようってのよ？ もう辺りも暗くなってきたているじゃない」

言われてみればと英一は辺りを軽く見まわした。バスから這い出た時より心なしか辺りが暗闇に沈みつつある。

「ぴーぴー喚いてそれでどうにかなると思ってんの千ヶ嶽は？ 私にしろあんにしろ等しく遭難者なんだからもう少しその喧しい口を謹んで周りを気遣えないの？」

初佳がやはりと云うか、かなり苛立ashedし気に言った。この先輩後輩は部内にあってかなり仲が悪いことで知られており、平素なら顧問が仲裁してどうにか事なきを得ているものだが今回はこの場におらず彼らにはその行方さえ知れぬもので、二人の対立に熱が帯びつつあった。

「あ？ アタシは当然のことを主張してるだけじゃないの。それとも何、十慧パイセンはこんな時こそ落ち着く為にデッサンでもしましよって言ってくれるわけかしら？」

「その妄想が叶えられなくてごめんなさいね、私、あなたよりは冷静なつもりだから」

「何を……っ！！」

こう云う時に言を発するものと、幾人かは意外に思った。

「すみません、みんな疲れて苛々しているでしょう？　ご飯に、しませんか？」

これまたそれにいきり立とうとした百香だが、そこで腹の虫が鳴る音がした。その発生源が百香だったことで彼女は毒気を抜かれてしまい、頭を振って座り込み自分の鞆を開いた。

「ご飯つつてもちよっとのお菓子しかないけど。ま、無いよりはマシだし」

由海がマツチを持っていたので周囲から枯れ枝や枯葉を集め、焚火を起こして皆でそれを囲んだ。全部を食べると明日食べるものがなくなってしまうと思うと自ずと皆小食になりはしたが、差し当たり剣呑な雰囲気は消え、女子は女子で男子は男子で取り合えず雑談を始めた。皆が不安を抱いていてそれから目を背ける為のものだとしても、その一時凌ぎが必要な時であることは誰もが内心で認めていた。

簡単な夕食が終わって少し落ち着いたところで月子が話を振る。このままこのバスの滑落地点に留まっても電波の届かない現状で救助が来るとは考え難い。現状自分たちに他の手がかりもない以上北にある城を目指し、そこで誰かいないかを確かめてみるべきではないかと。

「でもさ、そもそも西洋風の城って日本にある？　そんなわざとらしいものを探すより森の中にどこかしら住んでいる人や、或いはバス停とか道路とか何かしら人里へ辿れる手掛かりを探す方が現実的じゃないの？」

百香がここへ来て尤もな意見を出したと大方には思われ、それが顔に出た英一が彼女にじりと睨まれた。慌てて詫びを入れた英一をふんと百香は取り合わない。月子はそれに苦笑を浮かべ、続けて口を開いた。

「それはまあ確かにそうよね……じゃあ、ちょっと危ないかもしれないけれど、組み分けをして調べるのはどうかしら。あの城の傍には大きな道みたいなのがあって、それは多分こちら側に近いところまで通じている筈よ。もしかしたら干上がった川かもしれないわ。少なくともそれを見つけて辿りさえすれば城には辿り着ける。もしくはここから真っ直ぐ北に歩いても多分行けるでしょう」

「ふーん……でも、確か東側に湖があるって言ってなかった？」

「ええ、見間違いでないなら。……そうね、水源なら近隣に人が住んでいるならきつと何かある筈ね」

「と云うことは、少なくとも城の東側には誰かが向かうことになる」と云うことだね」

三年生の甫土侑人がそう発言した。左右に流した髪型の、どこか困り顔が似合う優しそうな趣の男子である。ちらと初佳が彼に視線を投げ掛けたが何も言わずにすぐこれを外した。

「まー何か見つけるならこの人数だし、幾らか手分けした方が楽に決まってるよな。んじゃ、霧海が東の湖に行ってくれよ。葦杜と並んで迷わなさそうだし」

「ええ、まあ……英一は？」

「俺？　ああ……じゃあ、東側は月子に任せようか」

「あ、じゃアタシも行く！　湖ってなら水浴び出来るじゃない、それに飲めるならそれだけで暫く持たせられそう」

「……ま、実利本位だろうと意欲的なのならこの際良しとしておきましょか。で、こはクンはどうするの？」

「おれっすか？　んー、じゃ、東でいいや。遠そうな西は葦杜が行ってくれるだろ」

「あーオレもオレも！　瑚潑センパイと一緒にの方が気楽だから」

紹がそう言うと言人もその場のノリと云う風でそれに乗っかる。紹はバックに流した短髪の快活かつ悪戯そうな面立ちの小柄な少年で、その明るい性格故に部の内外に交友の広い男子として知られていた。常人はそんな彼と美術部内にあってはよくつるんでいる、二枚目扱いするには軽そうな印象を

与える後輩であり往々にしてバカ二人と云う扱いで弄られる人物でもあったものだが、少なくとも部内で不真面目から来る言動を示して嫌われていると云うことはなかった。二人のこの意欲的だが深慮遠謀のなさそうな言に英一は苦笑を浮かべる。

「何だその理由……しかし四人も送ればそれなら十分か？」

「でしようね。西側も多くてそれだけいけば探索には十分だわ」

「あーっ、波に乗り遅れた！一緒に行動するなら霧海先輩とが良かったなあー」

累が不平を口にするが、当人の言う通り時既に遅しと云うもので紹と常人が彼女を宥めている。累は快活だが小柄な女子であり紹と同じくサッカー部員でもあることから斜面を上り下りしても元気が有り余っている様子だった。部内では特に月子に懐いている様子ではあったが、当人は何かをしたと云う感覚ではないらしい。この面々が喋り出すとこんな局面でも賑やかになってどこか心理的に緩く、気楽になるものだとかこれを見る面々には思わされた。そこでもむろに初佳が笑いをこぼして言う。

「くすっ……、じゃ東側のリーダーは霧海に任せるとして、西側は葦杜君、君が顔触れ選んで連れて行きなさい」

え、と英一は変な声が出たがそれで周囲はどつと笑った。赤面しつつも英一は月子を見る。月子はくすくすと笑いつつも、頑張るから、と小さく伝えた。それで英一は残りの三人ほどを選ぶとなったが、口を閉ざして成り行きを見守っている(と云うよりはどこか鬱憤を晴らす機会を伺っているかに見える)慎一郎には目が合っただけで拒絶され、取り合えず目に付いた脩人に話を振ったところ次の様に断られた。

「すまないけど英一君、俺は出来れば……初佳の周りにいておきたいから」

そう云えばと英一は脩人が初佳と交際関係にあったことを思い出した。と云ってそれは去年の秋から冬頃に掛けてまでのごく短い期間に過ぎず、初佳は脩人を早々に見限って別れたと云う。その話は彼女が三年生になるまでの冬が春になる間の時期に迂闊にも質した英一が初佳にきつく灸を据える様な調子で説明したもので、同時にその時期から脩人が部に姿を見せることが大分少なくなった理由でもあった。彼はしかし美術部を辞めたいとは思わなかったらしく初佳がいらないらしい日を探って幾度か顔を出しており、その二つの意味で未練たらしい姿は英一が一年生の時に美術部の勧誘と説明を彼が担当して以来部内での世話を焼いてくれた相手でなければ今少し醒めた視線で見る他なかったろうことである。応援しているとまでは云えずとも出来れば上手く後腐れを無くして卒業を迎えて欲しいものだと英一は思いつつ游次郎に声を掛ける。彼はまずこう質した。

「霧海は別行動すると云うからともかく、瀬之川に声を掛けなくて良いのか？」

これには英一も些か答えに窮した。たしかにまず奏美を連れて行くのが筋なのでは、と一瞬思いもしたがそもそも文科系一本の女子がどれだけ森林の探索に耐え得るものなのかと疑念に思われた。

「奏美は……ここに居残った方が安全じゃないでしょうか？」

「どうだろうな。和家じゃないが、派手に落ちた人工物と焚火がいい目印になったであろうことを思うとここが本当に安全かは疑問が残る。バスの中は滅茶苦茶だから雨露を一時凌ぎする程度は出来ても寝泊まりするのは無理だし、救助が万が一来てくれた時には真っ先に助けて貰えるだろうがさてそれまで何日掛かるか」

「……」

「とりあえず、他の子に声を掛けて数が足りなさそうなら考えてもいい。そう云うことで」

こう言われて仕方なく英一は他を探す。奏美は何となくまだ気が引けている為に他の男子を探し、京典に声を掛けた。丸眼鏡を掛けた如何にも大人しく地味な少年。しかしこの二人にはどうもあまり

接点がない。英一個人は特に避けているつもりこそないのだが、京典はこの上級生相手にどこか距離感を感じて来ているらしく美術部の活動にあっても事務的な会話以外まともにした試しがなかった。

「ぼく、体力ないですから」

「いや……だけど……」

「すみませんけれど、他の方でお願いします」

何ともにべもない感じがあつて英一は凹んで、その様子を見た游次郎が寄つて来て軽く肩に手を置いて来た。へこたれるんじゃないぞ、と視線で語る彼に少し励まされた英一は次に当たった。

「私……ですか……?」

一年生の名賀搗小春は大人しい子で通っており、喘息持ちらしいことでも知られていた。考えてみるとそれは凡そ探索と云う役回りに不適當この上ない人選にも思われ、彼は慌てて言葉を繕った。

「ああ、勿論嫌だつて云うならそう言ってくれ。無理には頼まないから」

「……」

「名賀搗……さん?」

「……ずっと、考えてました。ここ、どこなんでしょう。私たち、助かるんでしょうか。すごく不安で……正直こんなところいても立ってもいられない気持ちで」

「ああ……それは、何とか、俺や月子たちが……」

「あの、葦杜先輩。こんな私でよろしければ、手伝わせて下さい。ただの足手まといかもしれません、お願いします」

真摯にそう頼み込む小春にむしろ押され、英一は頷いた。それを見た時の小春の喜色はそこまで思うものであろうかと考えさせるものであった。このまとまらないウェーブがかつたセミロングの髪を垂らす背の低い、この場にあつてはどこか儚い印象を与える少女。可憐さに影が付き纏うこの女が自己主張をし、意思を示して行動を欲する姿を彼は見た試しがなくやや呆氣に取られていた。

「あ、英一くん、月子ちゃんと相談があるんだけど。小春ちゃんも一緒だね」

呼び掛けられた先に奏美の姿があった。傍らには月子があり彼女はずいといと近づいて、小春に軽く微笑んだ。

「あ、すみません……」

「謝ることじゃないわよ。ちょっと借りるから」

そう言つて月子は英一に小声で話し掛ける。

「英一、奏美のこと任せていい?」

「奏美のこと? もしかして、連れて行けつてことか?」

「そ。あの子にとつてあんたや私の傍が一番安心出来る場所なのは分かるでしょう?」

「まあな。でも、さっき正雁先輩にも言つたけど、ここで待つ方が安全じゃないのか?」

「安全なんてどこにあるか分からないわよ、こんな場所じゃ。それに城の東西は私たちで調べるからつて、残りが動かずに待つ訳でもないし」

「そうなのか?」

「十慧先輩や委員長が話し合つてるわ。と云つて、やっぱり動きたがらない委員長を先輩がやりこめている感じだけど。先輩や委員長を信用してない訳じゃないけど、それはそれだしね」

そこまで言つた月子は奏美に視線を投げ掛け、英一に顎をしゃくつてウィンクをした。奏美がおずおずと歩み寄つて来る。英一はこう云う彼女の姿をいつもどこかどきどきと緊張して見やる。月子が同じ様な仕草を見せるとしてもそれでその様に感じるとはどうにも彼には信じ難い。打ち解けた気安さを自分が奏美に持つていないのだろうか、と彼は自問を思い抱いた。

「英一くん、その……」

「大体のことは月子から聞いたよ。俺は安全を思うならここで皆と行動する方がいいんじゃないかと思うんだけど」

「うん……でも、わたしは、出来れば英一くんのところにいたいかなって……」

上目遣いでこの様に頼まれては英一も断り難い。彼は既に同行が決まった小春を見た。小春は穏やかに笑って一つ頷く。彼女が同意するならここで尚も反対役に回っても仕方あるまい。彼は納得して言った。

「分かったよ。どれだけやれるかは分からないけど、何かあったら俺が守るから。……あ、勿論、名賀搗さんもな？」

「うん！ 小春ちゃん共々、よろしくね。足を引っ張らない様に頑張ります」

月子が微笑ましくやり取りを見届け、手を振って自分の班の方へ歩き去って行く。三人は激励の言葉を投げ掛けながら手を振り返した。眺めながら英一はあと一人欲しいかなと思ひ、游次郎に改めて話を持って行こうかと考えたところでまた別の声を掛けられる。

「あの、葦杜君？」

彼が振り返って見たのは由海だった。少し遠慮気味の態度で三人を見やっているが、ここでわざわざ一人声を掛けて来るとなるとその目的はどこか推し量られた。

「楚さん？ えーと、もしかして、西側の探索に来たい……とか？」

「ええ、私で良ければ……」

由海はある意味典型的な美術部員で、普段の活動から部に回されて来る行事等にも積極的だが一個人としての彼女は穏やかで棘の少ない、初佳や現部長、或いは顧問からも信頼の厚い部員だった。一時は副部長に推薦されたこともあったが当人が辞退する程度には謙虚な人物像故か部内で由海を悪く言う者を英一は見たことが無かった。

「それは楚さんさえ良ければ構わないけど……何があるか分からないよ？」

「そう、だけど、こんな時あまりぼうっとしていたくないかなと思つて。でも霧海さんの班はもう十分つてなってるから、まだ人数足りてないなら一緒に行きたいわ」

まあ、実に文科系部員ばかりが揃った感のある西側探索組なことだがと英一は多少不安を思い抱かせたが断るだけの理由があるでもない。可能なら男子をもう一人捕まえたかったものだが、仮に今改めて游次郎に声を掛けても同学年を無碍にするな叱咤されるだろうと思われた。かくして英一の側も揃うだけは揃い、そのことを一同を仕切る初佳の元へ報告に赴いた。

「ふーん……成り行きとは云え、羨ましがられる構成になったわね」

初佳は面白そうにそう言つて英一のほっぺを人差し指でつついた。むず痒い思いを英一は抱いたものだが、実態として男一人に女三人と云う集団はどこか学校活動では馴染みの薄い揃え方に思われ反論のしようもなかった。傍らで聞いていた慎一郎がぼそりと、ハレム野郎、とどこか嫉妬深い一言をこぼした。かと思えば同じく居合わせた常人が累共々色男と囃し立てるので英一は対応に困り、苦笑している侑人に助けを求める様に顔を向けたのだが彼はただ無言で肩を叩くだけだった。……英一は平素印象の強い男子と云う程騒々しい存在ではなく、どちらかと云うと月子や奏美と一緒にいる付属物としての扱いを受けるくらいがあった。男前と言えなくもない面立ちに高めの背丈。しかしそれにしなやかに映える長身をした游次郎程ではないのだ。平素なら肉体労働係とやや自虐めいて称するところを月子が苦笑し奏美が宥める。そしてそれを見て周りがほら始まった、とどこか微笑ましそうに呆れる。そう云う男がここに至って女子三人の面倒を一手に引き受けると云うのはどこかアンバランスなような、案外適役とも取れるような絵面となっており誰もが彼を弄り回さずにはいられないのだった。

報告は游次郎にもしたのだが彼の場合はそうした周囲に比べれば余程落ち着いた態度でこれを聞き、微笑を浮かべて言う。

「これは確かに、俺が先に加わっておいた方が良かったかもしれないな。力仕事が必要になったらお前一人と云うのは少し心細いだろうから」

「そこまで予想が付いていた訳じゃないですけど、正雁先輩がいてくれたらよほど気が楽だと思っていますよ」

「お前が俺をそうして期待してくれているのと同じ様に、お前の周りの子もお前が引っ張って行ってくれることを期待していると思うぞ」

「や、まあ……いや、止めて下さいよ、俺はそんな大した奴じゃないですから」

「でも、瀬之川や楚、それに名賀搗の期待に応えないのは格好悪いと思うんだが？」

「むう……」

「あまり難しく考えなくていいだろ。差し当たり俺たちは生き残る為に動かなくちゃいけないんだから」

どこか游次郎にはこう云う達観した物言いとそれを表出する表情・態度があった。彼は空を見ていた。うっすらと禍々しい模様が見える夜の空を。その表情にどことなしの不安を英一は覚えたが敢えて口にするのではないとして心の内に仕舞っておいた。

一同は翌日からの探索に備えて就寝となったが、碌な設備も無い地面での雑魚寝とならざるを得ないことには誰しも不満があった。解決しようない不満と云うものは全く始末に負えぬもので、ただでさえ寝心地の悪い硬い地面に身を横たえてなので必然的に誰ともなしに愚痴がこぼれ、なかなか寝付ける環境ではなかった。英一は奏美に乞われてその隣に寝ることになったが、付いて来るように小春や由海もやって来て寝入り始めたので彼としてはどうにも居心地の悪い環境だった。月子は向かい側で自分と組む面々と眠っている。あいっちゃんと寝付いているんだろうか、と少しだけ彼は月子を慮った。焚火は燃料不足故に消され、辺りは闇が覆っていた。何が起るか分からないことから一人が交代で起きて歩哨することになったがどうせ寝付けないので最初に歩哨に立った侑人に紹が寄って来て、小声で雑談をしていた。それも侑人から慎一郎に交代になったところで紹が共々寝入り、辺りは全く静かになった。歩哨と云っても辺りは暗闇、ただ微かな風が樹々を揺らしている音以外何も感じられない。あれだけ元氣だった紹が早々に眠ってしまったのもどこか慎一郎には納得せざるを得ない程度に彼もうつらうつらと意識が揺らめき始めた。彼は自分のスマートフォンを点けてその明かりと時間を見、少しだけ意識を覚醒させる。概ね三時間で交代と決められており、彼の番はあと半時間もすれば終わる頃合いに差し掛かっていた。スマートフォンを消して懷に仕舞った彼は空を見上げ、欠伸を一つする。ああ、早く終わればいい。早く助けが来ればいい。こんな訳の分からない事態に巻き込まれるいわれが自分のどこにあるものか。彼は心中でそう毒づいた。

ぶわ、と耳慣れない音が一带に響いた。その音を聞いたのは慎一郎だけではなく今一つ寝付けないままだった英一と初佳もだった。英一はその音自体を疑問に思ったが、初佳は身を起こして夜闇に包まれた辺りを見回す。既に夜に目が多少は慣れたらしい慎一郎も辺りをどこかびくつきながら見回している。だしぬけに、ドン、と地面から音が響いた。これには英一もがばりと起き上がり、それとほぼ同時に月子も飛び起きた。――四人は焚火の跡から異様な光が迸り始めているのを見た。極彩色の光。この夜を禍々しく照らす光に異常事態を悟った初佳が声を上げる。

「みんな、起きなさい！ 何か起こる！」

寝入っていた者らを英一と月子は一度視線を合わせて頷き、揺すって起こし始めた。再びドンと地面から音が今度は更に大きく響き、焚火の跡から光の塊が浮かび始めた。起き抜けて来た寝ぼけ眼の者らもそれを見て事態の異様さを察し、慄き始める。英一と月子は自分の携帯鞆をふん掴んで何が起こってもよい様に備えた。光の塊は割れて、中から現れたのは悪霊とでも云うべき紫白の光を纏った髑髏の群々だった。

——キエアアアアアアアアア！！！！

その絶叫は耳を劈く様に響き、聞く者の精神に恐怖を齎した。何だこれは、と一人が発する。然して暑くもない筈のこの時に脂汗を滲ませ始めたのを感じながら。髑髏は、その悪霊は散ってそれぞれにこの場にある人間たちへ飛び掛かり始めた。そこで多くの絶叫が響いた。髑髏の一つが腰を抜かした慎一郎に飛び掛かり、さながらそれを飲み込むように覆い被さった。彼の悲鳴は途中でぐぐもり、途切れた。

「逃げろ！！」

英一は半ば反射的にそう叫んで、固まっていた奏美が我に返って一目散に逃げだす。傍らで足の竦んでいる小春が僅かに首を動かして彼を見た。英一はままと彼女の手を引いて走り出す。その後を由海が悲鳴を上げながら続く。その反対側では月子が、走って、と叫んで駆け出していた。走る中で彼らは後ろから爆音が響いたのを聞いたが、振り返ることは躊躇われただ無心に前へと走り続けた。——英一が必死で走るその姿を、森の中でほんの小さな少女の瞳が見つめていたことを誰も気付くことはなかった。

朝焼けを示す陽光が差し込まないにも関わらず少しずつ空は闇が薄れ、明るくなり始める。その陰鬱な暁の下にあって滑落したバスの周辺には既に誰もいなかった。大穴だけが残りバス諸共その場にあつたものは皆姿を消し、悪霊に吞まれたと思しき慎一郎の姿もまた残されていなかった。

最終更新二〇二六年八月十四日